

翻訳・非翻訳小説における女ことば

一文末詞使用と読者受容

古川 弘子

(東北学院大学)

The purpose of this paper is twofold: (1) to compare female speech in translated texts and in novels originally written in Japanese; and (2) to investigate the readers' reception of the language use. This comparative study is mainly conducted on the following contemporary novels: the Japanese translation of Chasing Harry Winston (Weisberger, 2008) and the Japanese novel Amakara Karutetto (literally, A Salted and Sweetened Quartet; Yuzuki, 2015a). They are analysed quantitatively with a focus on the sentence-final particles, which are a representative of female language in Japanese. For the reception study, a questionnaire is used to explore which features of the language use the reader finds in these texts and how they feel about the features.

1. はじめに

本稿の目的は2つある。第一に、現代女性向けの小説の翻訳テキストと非翻訳テキスト（日本語で書かれたテキスト）の女性登場人物の会話文の中に女ことばがどのように使われているのかを調べることである。次に、読者がその文体をどのように受容するかを探ることだ。翻訳テキストに出てくる女性が最も女らしい話し方をしていると指摘されているが（中村, 2012, pp. 9-11）、実際に翻訳テキストと非翻訳テキストに出てくる女性の話し方を比較した研究は、ほぼ Fukuchi Meldrum (2009; 2010, pp. 95-97, 119-123) に限られていた。また、翻訳テキストに出てくる女性の話し方についての読者受容研究もこれまでほとんど行われていなかったため、今回の研究でデータを提示したい。

本稿で示す翻訳テキストとは、外国語から日本語へ訳されたテキストのことである。また、非翻訳テキストは最初から日本語で書かれたテキストを意味する。文体とは「書き言葉や話し言葉にみられる独特な表現方法 (the perceived distinctive manner of EXPRESSION in writing or speaking)」(Wales, 2011, p. 397; 強調は原文ママ) と定義され、

FURUKAWA Hiroko, "Women's Language in Japanese Translations and Original Novels: The Use of Sentence-final Particles and Its Reader Reception," *Interpreting and Translation Studies*, No.17, 2017. Pages 93-111. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

文体的特徴とは一般に言語的特徴のことを指す (Wales, 2011, p. 398)。本稿の第一の目的である翻訳・非翻訳テキストの文体比較では、この定義を用いて言語的な特徴、中でも文末詞に焦点を当てた定量分析を行う。文末詞に焦点を当てる理由は、文末詞は日本語の女ことばの代表的な用法とされており、文末詞の使用には顕著な性差がみられるからだ (益岡・田窪, 2014, p. 52, pp. 222-224)。そこで、定量分析によって文末詞の使用を数値化することにより翻訳・非翻訳テキストの文体の傾向を客観的に探りたい。

翻訳小説と非翻訳小説の文末詞の使用を調べるにあたって、筆者は先に児童文学の『魔女の宅急便』シリーズと「ハリー・ポッター」シリーズを対象として、主人公の少女の会話における文末詞使用に焦点を当てた定量分析を行った。この分析では、中村 (2012, pp. 9-11) の指摘のように翻訳テキストの主人公の方が非翻訳テキストの主人公よりも女性文末詞を使用する割合が高いことが分かった (Furukawa, 2017)。

では、大人向けの翻訳小説と非翻訳小説でも同様の傾向がみられるのであろうか？物語の舞台を現代に設定した現代小説は、翻訳・非翻訳テキストともに登場人物の言葉づかいに現代の日本女性の言葉づかいを再現しやすいと予想される。現代小説の中でも、若い女性を対象とし、かつ複数の女性が登場する物語であれば女性登場人物の文末詞使用の分析に適している。筆者はこれまで大人を対象読者とした翻訳テキストの文末詞使用についての分析を行ってきたが、非翻訳テキストについては十分なデータを持っていないため、今回は『あまからカルテット』(柚木麻子著, 2015a, 以下『カルテット』と略す)と『ハリー・ウィンストンを探して』(佐竹史子訳, 2009 a, 以下『ハリー』と略す)を対象に比較分析していくことにした。今回は定量分析により会話文の文末詞使用を数値化し、文体的特徴を調べていく。

翻訳・非翻訳テキストの文体を比較分析した後には、それぞれの文体に対する読者受容を調べる。筆者が過去に行った研究では、ある翻訳者が女ことばをなるべく使わずに日本語に訳したコナン・ドイル作品が、その編集過程で女ことばを加えられて出版された事例があった (Furukawa, forthcoming)。この変更の背景には、翻訳者以外の仲介者 (編集者など) が読者は「翻訳テキストはこうあるべきであるという期待」 (Chesterman, 2016, p. 62, 筆者による翻訳) を持っており、それに合わせる必要があると考えたのではないかと推測される。しかしながら、読者が翻訳テキストに対してある種の期待を本当に持っているのかについては疑問が残る。「出版する側が考える読者の期待」と「読者が実際に持っている期待」が合致していない可能性もある。そこで、読者は翻訳・非翻訳テキストにどのような文体的特徴を見るのか、またその特徴をどう受け止めたかについてアンケートを通して探りたい。

2. 『あまからカルテット』と『ハリー・ウィンストンを探して』

分析を行う前に、それぞれのテキストについて簡単にまとめたい。『ハリー』の原書は Lauren Weisberger 著の *Chasing Harry Winston* (2008) である。『ハリー』は文庫本の

みの出版だが、『カルテット』は2011年に単行本として出版されたのち、2013年に文庫版が出ている。今回の分析に使用したのは2015年刊の文庫版11刷（柚木, 2015a）だ。今回の比較分析対象にこれらのテキストを選んだ理由は、この2作には共通点が4つあることだ。第一に、恋愛や仕事をテーマにした若い女性向けの小説であり、登場人物の年齢設定や状況が似通っていること。第二に、対象読者がほぼ一致していると考えられること。第三に物語の中に複数の女性が登場すること。そして、物語が登場人物の会話を中心に展開していくことである。

『カルテット』の主人公は女子中学校からの仲良し4人組、咲子、薫子、由香子、満里子の28歳から29歳までを描いた物語だ。古風な美人である咲子は音大を出て自宅でピアノを教えている。東京の二子玉川で母親と2人で暮らしており、大学時代からの恋人と別れてからは「恋愛対象になりうる異性」（柚木, 2015a, p. 9）と6年間話したことがなかった。薫子は大手出版社勤務で男性月刊誌の編集者から書籍編集者となり、人気作家を担当している。女子高時代には「成績もスポーツも学年トップ、生徒会と陸上部部長と文芸部を掛け持ちしていた」（柚木, 2015a, p. 135）というほど活動的な人物だ。由香子はおとなしい性格の主婦だが、料理について書いていたブログが人気を呼び、ついにはテレビや書籍で人気の料理研究家となった。由香子の夫は食品メーカー勤務で、現在はオーストラリアに単身赴任している。満里子は丸興デパート日本橋店「ボーテ」の店長を務める、自他ともに認める美人の美容部員だ。満里子は女王様タイプで、他の3人からは「満里子さま」（柚木, 2015a, p. 15）などと呼ばれることもある。

『ハリー』の登場人物は大学時代からの親友同士である女性3人組のリー、エミー、アドリアナで、この物語でも彼女らは30歳を目前にして恋愛、結婚や仕事に悩んでいる。出版社勤務のリーは、親友2人からは仕事も恋人も家族も、最近購入した新居も申し分がなく、何も不満はないだろうと思われる。しかし、本人は「異常なまでの心配性」（佐竹, 2009a, p. 11）であり、「絶対的な愛情を注いでくれる恋人」（佐竹, 2009a, p. 85）に息苦しさを感じている。エミーはあるレストランのマネジャーを務めている。結婚して子供を持つことを夢見ていたが、5年間付き合った彼への誕生日プレゼントとしてスポーツジムの会費を払い、さらにはパーソナルトレーニングを申し込んだところ、23歳のパーソナルトレーナーに彼を取られてしまった。アドリアナはブラジル人富豪の令嬢で、大学を出てから仕事もせずに両親の所有するニューヨークのアパートメントのpenthouseに住んでいる。大学から一緒にリーに「これほど美しい女の子がいるなんて、おどろきというしかない」（佐竹, 2009a, p. 21）と思わせるほどの容姿の持ち主だ。

どちらの物語も親友同士の会話を中心に展開していく。『ハリー』の「訳者あとがき」と『カルテット』に寄せられたアマゾンジャパンのカスタマーレビューでは、同い年の女同士の微妙な関係が的確に描かれていることが指摘されている（佐竹, 2009b, p. 526; こんぺい党, 2012, n.p.）。それぞれの作家の執筆時の年齢が登場人物の年齢に近いことも、30歳を前にした女性の焦りや女友達に対する心理描写などに影響しているか

もしれない。『カルテット』の著者である柚木麻子が1981年生まれなのに対し、『ハリー』の著者であるアメリカ人のローレン・ワイズバーガーは1977年生まれであり、互いに年齢も近い¹⁾。友人同士の会話文が多いため、この2作は定量分析の研究対象として適しているといえる。

2.1 複数の登場人物の文末詞使用比較

『カルテット』と『ハリー』の女性登場人物の会話文を調べるにあたって、ここでは文末詞使用に焦点を当てた定量分析を行う。具体的には、『カルテット』の4人の登場人物がそれぞれ他の親友と話している場面の会話文をすべて取り出し、Okamoto and Sato(1992)の分類に従って *feminine forms* の2段階 (*strongly feminine forms* と *moderately feminine forms*)、*masculine forms* の2段階 (*strongly masculine forms* と *moderately masculine forms*)、*neutral forms* に5分類する。この分類は、Okamoto and Sato が Shibamoto (1985) などの先行研究を基に作成したものだ (Okamoto and Sato, 1992, pp. 480-482)。

例えば *feminine forms* では、「行くわ」「来るかしら」の「わ」「かしら」、「明日よ」など名詞の後に来る「よ」、「きれいな」のようにナ形容詞の後に来る「の」は *strongly feminine forms* に分類される。また、「行くの」のように動詞の基本形の後に来る「の」や「明日ね」「明日でしょ」の「ね」「でしょ」は *moderately feminine forms* に分類される。*Masculine forms* では、「行くぞ」「行くな」「暑いな」の「ぞ」や「な」は *strongly masculine forms* に、「行くんだ」「明日だ」「明日だよ」の「んだ」「だ」「だよ」は *moderately masculine forms* に分類される。*Neutral forms* には「行く」「おいしい」のように文末詞を付加しない文や、「おいしいよね」(同意を求める場面)の「よね」や「おいしいね」のようにイ形容詞の後に来る「ね」などが含まれる。文末詞は主に普通体の文末に現れるため、丁寧体を使わない親友同士の会話文を今回の分析の対象としている。

『カルテット』の4人の登場人物の文末詞使用は表1の通りである。分析対象となった文は咲子が229、薫子が351、由香子が231、満里子が249だった。*Feminine forms* の使用率を見ると、咲子の使用率は37.55%、薫子が22.22%、由香子が31.17%、そして満里子が30.12%という結果となった。古風な美人のピアノ教師として描かれている咲子の使用率が最も高く、活動的でリーダー的存在として描かれている薫子の使用率が最も低かった。咲子と薫子との差は15.33%であった。*Masculine forms* の使用率については、咲子は10.48%、薫子は20.51%、由香子は12.55%、満里子は16.06%だった。薫子の使用率の高さが突出しており、一番使用率が低かった咲子との差は10.03%である。*Neutral forms* の使用率は咲子が51.97%、薫子は57.26%、由香子は56.28%、満里子は53.82%となった。

表1 『あまからカルテット』の4人の登場人物の文末詞使用比較 (%)

	咲子	薫子	由香子	満里子
Feminine forms	37.55	22.22	31.17	30.12
- Strongly feminine forms	18.34	7.69	13.42	16.87
- Moderately feminine forms	19.21	14.53	17.75	13.25
Masculine forms	10.48	20.51	12.55	16.06
- Strongly masculine forms	0.44	1.42	0.43	1.20
- Moderately masculine forms	10.04	19.09	12.12	14.86
Neutral forms	51.97	57.26	56.28	53.82

- (1) 対象文は咲子が 229、薫子が 351、由香子が 231、満里子が 249。
 (2) すべて小数点第3位で四捨五入したため、合計が 100.00% とならないものもある。

この結果を筆者が過去に分析を行った『ハリー』の結果(古川, 2013)と比較したのが表2である。この表から、『ハリー』の登場人物3人の *feminine forms* の使用率が『カルテット』よりもかなり高いことが分かる。『ハリー』での *feminine forms* の使用率はリーが 42.76%、エミーが 41.38%、アドリアナが 41.95% であり、リーと『カルテット』で最小値だった薫子の 22.22% との差は 20.54% にも及ぶ。また、『ハリー』の登場人物がほとんど *masculine forms* を使わないことも目を引く。それぞれの使用率はリーが 0.00%、エミーが 0.53%、アドリアナが 0.45% であった。『カルテット』の4人がそれぞれ約 10~20% の使用率だったことと比較すると、この *masculine forms* の使用率の低さは特筆すべきだ。Neutral forms の使用率がリーは 57.24%、エミーは 58.09%、アドリアナは 57.59% と、『カルテット』の数値とそれほど変わらないことを考えると、『カルテット』の *masculine forms* の使用率が『ハリー』よりも際立って高いことが分かる。

表2 『ハリー・ウィストンを探して』の3人の登場人物の文末詞使用比較² (%)

	リー	エミー	アドリアナ
Feminine forms	42.76	41.38	41.95
- Strongly feminine forms	28.81	24.14	27.97
- Moderately feminine forms	13.95	17.24	13.98
Masculine forms	0.00	0.53	0.45
- Strongly masculine forms	0.00	0.00	0.00
- Moderately masculine forms	0.00	0.53	0.45
Neutral forms	57.24	58.09	57.59

- (1) 対象文はリーが 767、エミーが 754、アドリアナが 665。
 (2) すべて小数点第3位で四捨五入したため、合計が 100.00% とならないものもある。

さらに、『カルテット』と『ハリー』との比較で目立つのは、『カルテット』の登場人物の数値にばらつきがある一方で、『ハリー』の登場人物の数値はお互いに似通っているということだ。例えば、*feminine forms* の使用率が最大だったリーと最少だったエミーとの差は 1.38% しかない。これは『カルテット』の咲子と薫子との差 15.33% と対照すると際立って小さい。『カルテット』も『ハリー』も、それぞれの登場人物の生い立ち、性格、仕事など現在の状況が全く異なっているにも関わらず、『ハリー』の 3 人の文末詞使用の傾向がこれほど似ていることは、注目に値する。『ハリー』では 3 人の二人称代名詞にやや違いがあり、リーとエミーが「あなた」、アドリアナが「あんた」と呼んではいるが、文末詞使用に関しては、3 人の結果が相似している。

『ハリー』と『カルテット』の約 10 年前に発行された作品だが、筆者が過去に分析をした別の翻訳テキストの結果 (Furukawa, 2009) を見ると、ここでも性格描写の違いにも関わらず複数女性の文末詞使用が似通っていることが分かる。表 3 には『ブリジット・ジョーンズの日記』(亀井, 1998; Fielding, 1997; 以下『ブリジット』と略す) の女性主人公ブリジット、その女友達シャロンとジュードの文末詞使用を示したが、3 人の *strongly feminine forms* と *moderately feminine forms* の使用率に多少のばらつきは見られたものの、*feminine forms* の使用率は傾向が似ている。加えて、*masculine forms* の使用率がゼロかそれに近いことも『ハリー』の結果と相似している。

金水によれば (2014, p. 8)、フィクションには老人語などの典型的な役割語³が使われ続ける一方で、「近年では、フィクションの中の女性が、『あら、雨だわ』のような、露骨なく女ことば>を用いることは逆にまれになってきた」(金水 2014, p. 8) という。キャラクターによって女性のセリフに「あれ、雨だよ」や「おい、雨だぜ」などと役割語を使い分けることで、女性を描き分けているようだ。金水は非翻訳テキストを念頭に置いているようだが、上に示した翻訳テキストにおいては、キャラクターを描き分けるために女ことばを使っているわけではないようだ。

表 3 『ブリジット』の 3 人の登場人物の文末詞使用比較 (%)

	ブリジット	シャロン	ジュード
Feminine forms	45.22	45.89	47.69
- Strongly feminine forms	28.70	31.77	36.92
- Moderately feminine forms	16.52	14.12	10.77
Masculine forms	0.87	0.00	0.00
- Strongly masculine forms	0.87	0.00	0.00
- Moderately masculine forms	0.00	0.00	0.00
Neutral forms	53.91	54.12	52.31

(1) 対象文はブリジット 115、シャロン 85、ジュード 65。

(2) すべて小数点第 3 位で四捨五入したため、合計が 100.00% とならないものもある。

2.2 柚木麻子の他の小説との文末詞使用比較

『カルテット』の登場人物の *feminine forms* の使用率が低かったのは、作者柚木麻子の特性であるという可能性もあるが、同じ作者による小説『ランチのアッコちゃん』の主人公アッコちゃんの文末詞使用を分析すると、柚木が登場人物の性格描写に合わせて文末詞使用を変えたことが分かる。『ランチのアッコちゃん』（2013, 以下『アッコちゃん』と略す）は、教育系出版社の営業部長アッコちゃんと派遣社員の三智子との交流を三智子の視点から描いた物語だ。

分析に使ったのは、2015年刊行の『アッコちゃん』の文庫版（柚木, 2015b）である。表4に示したのが、文庫版に収録された短編「ランチのアッコちゃん」と「夜食のアッコちゃん」の分析結果と、「ランチのアッコちゃん」と「夜食のアッコちゃん」の分析結果を平均したものである⁴。それぞれ、表中では「ランチ」「夜食」「ランチ+夜食」と表記している。対象としたのはアッコちゃんの三智子に対する発話文で、「ランチ」が101文、「夜食」が129文、「ランチ+夜食」が230文であった。アッコちゃんは45歳独身、173センチの長身で肩幅も広い。そのため「アッコ女史」のあだ名をつけられ、「社内にもほとんど私語もなく、ひたすら業務に集中して成果を上げる彼女を、誰もが恐れている」（柚木, 2015b, p. 10）と描かれている⁵。

アッコちゃんの文末詞使用を見てみると、*feminine forms* の使用率が「ランチ」では48.51%、「夜食」では56.59%、「ランチ+夜食」では53.04%と、40%代後半～50%半ばという結果が出た。この数値は、上の表1～3に示した『カルテット』、『ハリー』、『ブリジット』のどの登場人物よりも高い。同じ作家による『カルテット』の結果（表1）と比較すると、『アッコちゃん』における *feminine forms* の使用率の高さは際立っている。

金水（2014, p. 8）の指摘にあるように、日本語で書かれたフィクションでは女性のキャラクター設定に応じて言葉づかいが変えられることは確かにあるようで、水本（2010, pp. 101-103）がテレビドラマの脚本家に対して行った意識調査の結果からも、同様の傾向が読み取れる。この調査では、約70%の脚本家が自分の書くドラマの女性登場人物のセリフに女性文末詞を使うと答えており、中でも知的職業従事者（教師、弁護士、キャリアウーマン、社長秘書）には日常的に女性文末詞を使わせるという結果が出た。アッコちゃんはまさにキャリアウーマンであり、ドラマの脚本家と同様に、柚木も女性文末詞を使わせたと考えられるだろう⁶。

表4 『ランチのアッコちゃん』のアッコちゃんの文末詞使用比較 (%)

	ランチ	夜食	ランチ+夜食
Feminine forms	48.51	56.59	53.04
- Strongly feminine forms	39.60	38.76	39.13
- Moderately feminine forms	8.91	17.83	13.91
Masculine forms	0.99	0.78	0.86
- Strongly masculine forms	0.00	0.78	0.43
- Moderately masculine forms	0.99	0.00	0.43
Neutral forms	50.50	42.64	46.09

(1) 対象文は「ランチ」が101、「夜食」が129、「ランチ+夜食」が230。

(2) すべて小数点第3位で四捨五入したため、合計が100.00%とならないものもある。

2.3 日本女性との文末詞使用比較

では、上で複数の登場人物について分析した『カルテット』と『ハリー』の結果を現代女性の言葉づかいと比較するとどのような結果になるだろうか。下の表5には、『カルテット』と『ハリー』の平均値をまとめた。さらに、日本女性の会話文で文末詞がどのように使われているかを研究した Okamoto & Sato (1992, pp. 478-486) のデータを「O&S」として示した。

Okamoto & Sato (1992) では、27歳～34歳までの日本人主婦3人（大学院生の妻1人と会社員の妻2人）の会話文390を対象としている。データ収集時は、全員がアメリカのカリフォルニア州フレズノ在住で、アメリカ在住は3年以内だった。『カルテット』と『ハリー』の登場人物はいずれも30歳前後であり、Okamoto & Sato (1992) の研究対象と年齢が近いことが、この言語学研究のデータを比較対象に選んだ理由である。

『カルテット』と Okamoto & Sato (1992) のデータを比較すると、feminine forms の使用率は『カルテット』がやや高いものの、masculine forms の使用率はほぼ同等といってもよい。この結果から、今回の分析テキストにおいては、非翻訳テキストに登場する女性の文末詞使用が現実の女性のものに近づいたといえる。Okamoto & Sato のデータは1992年のものであり、これが現代女性の話し言葉といえるかどうかは疑問の余地があるが、対象年齢などを考慮すると比較対象となりうるデータが他にないため、ひとつの指標として参照した。

表5 『カルテット』と『ハリー』の文末詞使用の平均値と日本女性の文末詞使用 (Okamoto & Sato 1992) との比較 (%)

	カルテット	ハリー	O&S
Feminine forms	30.27	42.03	24
- Strongly feminine forms	14.08	26.97	12
- Moderately feminine forms	16.19	15.06	12
Masculine forms	14.90	0.33	14
- Strongly masculine forms	0.87	0.00	0
- Moderately masculine forms	14.03	0.33	14
Neutral forms	54.83	57.64	62

- (1) 対象文は『カルテット』が1060、『ハリー』が2186。
- (2) Okamoto & Sato は27-34歳までの日本女性の会話文390を対象とした。
- (3) Okamoto & Sato 以外はすべて小数点第3位で四捨五入した。

翻訳テキストにみられる文体について、サルダーニャは2つの概念 “translation style” と “translator style” を提示した (Saldanha, 2011, pp. 26-28)。Translation style とは “the style of the *text*” (Saldanha, 2011, p. 27, 強調は原文ママ) であり、原文の意味と文体を再構築した結果生み出された文体のことである。一方、translator style とは “the style of the *translator*” (Saldanha, 2011, p. 27, 強調は原文ママ) で、翻訳者が翻訳テキストで使う言語的特徴や非言語的特徴 (どのテキストを翻訳するか、など) を指す⁷。

上に示した定量分析の結果では、複数の翻訳テキストに現れる女性文末詞の使用率が似通っていた。つまり、文末詞使用に関しては、日本語への翻訳テキストに特徴的な傾向がみられるということだ。したがって、日本語への翻訳テキストにみられる文体は translator style といえるだろう。ただし、サルダーニャの考える translator style は翻訳者が原文を主観的に解釈した結果としての言語的、非言語的特徴を指しているため、上のように複数の翻訳テキストに現れる特徴は translator style の定義には当てはまらない。

チェスターマンは、読者が翻訳テキストに対して期待する文体などに翻訳者が適合させようとする際の規範を “expectancy norms” (期待規範; Chesterman, 2016, pp. 62-65) と呼んだが、上の分析で見られた文体は expectancy norms に影響を受けた expectancy style と表現できる。しかし、第一章に示したように「出版する側が考える読者の期待」と「読者が実際に持っている期待」が合致しているとは言い切れない。そこで次章では読者が翻訳・非翻訳文体をどのように受容するのかについて探っていく。

3. 『カルテット』と『ハリー』の読者受容

上の定量分析では、『カルテット』と『ハリー』の女性登場人物の文末詞使用にはか

い離があることが分かった。また、『カルテット』の4人の文末詞使用率にはばらつきがある一方で、『ハリー』の3人の文末詞の使用傾向が似かよっていることが分かった。では、読者は翻訳テキストと非翻訳テキストをどのように受容するのであろうか。読者があるテキストを見たとき、(1) どちらが翻訳小説でどちらが翻訳小説でないかを判断することができるのであろうか。また、(2) それぞれのテキストに対してどういった特徴を見出し、それらの特徴からどのような印象を受けるのであろうか。ここからは、大学生に行ったアンケートの結果をもとに、翻訳テキストと非翻訳テキストの文体に対する読者受容について探っていく。

3.1 どちらが翻訳小説だと思うか？

このアンケートは、東北学院大学の文学部英文学科で提供している専門3科目「英語コミュニケーション演習」(3、4年生対象)、「異文化間コミュニケーション研究」(4年生対象)、「社会言語学」(3年生対象)の受講者を対象とした。上記科目を複数受講している学生は、いずれかの科目で回答した。まず(1)の疑問についてのアンケートの内容は下の枠内のおりである。『ハリー』と『カルテット』の会話部分のみを出典は示さずに抜粋し、どちらのテキストが翻訳されたものかを答えてもらった。テキストAは『ハリー』(p. 327)、テキストBは『カルテット』(p. 96)からの抜粋である。テキストAとテキストBの分量がほぼ同じであるのが理想だが、今回は各テキストの登場人物全員が会話に参加している部分を抜粋したことと、テキストAの方が1つの発話が長い箇所が多かったことから、分量に差が出てしまった。内容に関しては、ともに、ある男性について女友達と語っている場面であり、会話の参加者、状況、トピック、機能すべてにおいて類似しているといえる(東, 2011, pp. 10-11)。

アンケートの回答者総数は128名である。128名は母数として決して多いとはいえないが、ひとつの指標としては参考になるだろうと考える。回答者の年齢の内訳は、20～22歳が124名、25～30歳が1名、50代が1名、60代が1名、未回答が1名だった。また性別の内訳は、女性が83名(全体の64.8%)、男性が43名(全体の33.6%)、未回答が2名だった。アンケート実施日は「英語コミュニケーション演習」と「異文化間コミュニケーション研究」が2017年5月8日(月)、「社会言語学」が同年5月9日(火)である。

右ページのテキストAとテキストBを見て下さい。両方とも、若い女性向けの小説の一部で、仲良しの女友達(29～30歳)が会話している場面です。●●、▲▲、◆◆、■■の部分には、登場人物の名前が入ります。一方が日本語に翻訳された小説で、もう一方が日本語で書かれた小説です。

験はないだろうと推測できる。

表6に示した結果を見てみると、アンケートへの回答者のうち107名、全体の83.59%の人が翻訳テキストはテキストAであると回答した。ここから、8割以上の人が翻訳テキストと非翻訳テキストを正確に区別できることが分かった。

表6 「テキストAとテキストBのどちらが翻訳小説だと思うか？」

	人数(人)	割合(%)
テキストA	107	83.59
テキストB	21	16.41
計	128	100.00

(1) 割合はすべて小数点第3位で四捨五入した。

3.2. 翻訳テキストと非翻訳テキストの特徴と印象

上のアンケート結果より、読者の8割以上が翻訳小説の文体を非翻訳小説の文体と区別できることが分かった。それでは、読者は翻訳テキストと日本語で書かれたテキストに対してどのような特徴を見出し、それらの特徴に対してどのような感想を持つのであろうか(疑問(2))。この章では、翻訳テキストの読者受容を知るために、テキストAを選択した人の回答のみを取り上げて分析していく。質問内容は以下のとおりである。

- (2) なぜ(1)でそのテキストを選びましたか？何か特徴はありましたか？
()
- (3) (2)で答えた特徴について、あなたはどう感じますか？
()
- (4) (1)で選ばなかった方のテキストについて、どのような特徴があると思いますか？
()
- (5) (4)で答えた特徴について、あなたはどう感じますか？
()

まず、テキストAの特徴とその特徴に対する感想を説明するために使われた表現を挙げると、最も多かったのは「違和感」で、回答の中に16回登場した。次によく使われた表現は「不自然」(14回)、「かたい、硬い、固い」(12回)、「読みにくい、よみにくい」(4回)であった。その一方で、テキストBを説明するために多く使われた表現は「自然」で26回登場した。次に多かったのは「日常、日常的、日常会話、日常会話的、会話的」(9回)であった。

次に個別の質問についてみていく。テキストAの特徴として挙げられたものを分類

したのが表7である。指摘の多かったものから順に1.「語句の選択（言い回しなど）」、2.「文末詞の使用」、3.「文の構造（主語・述語関係、指示語、文の長さなど）」、4.「文の硬さ（フォーマリティ）」、5.「会話内容」であった。1から5のいずれの分類にも当てはまらないものは、6.「その他」としてまとめた。翻訳する際に原文の会話内容を変えるわけにはいかないが、それ以外の語句の選択、文末詞の使用、文の構造が主な特徴として挙げられていたことから、読者は翻訳テキスト独特の文体をつかんでいることが分かった。

本稿の分析対象である文末詞の使用を指摘する人は2番目に多かった。具体的には「語尾に違和感があった」、「現代ではあまり使われない『～しているわ』『～なのよ』が使われている」、「もちろんよ！って言わないから」、「女言葉の多用」、「もちろんよ、～しているわよなどと普通の日本人の会話ではそんなこと言わないから」、「語尾が意図的な感じがしたから」、「文末形式が『の』『ね』『わ』など、女性らしい言葉がBより多く使われているから」、「女性の話し言葉がいかにも、という感じであらわれている」などの意見があった。ただし、「自然」と評された非翻訳テキストの文末詞使用には、節2.3に示した現実の女性の文末詞使用との比較では多少の乖離があった。文末詞使用について指摘した人の内訳は、3年生が10名で、そのうち「英語コミュニケーション演習」で回答した人は4人、「社会言語学」で回答した人は6人だった。4年生は13人で、「英語コミュニケーション演習」で回答した人は4人、「異文化間コミュニケーション研究」で回答した人は9人だった。

表7 「テキストAにはどのような特徴があるか？」

特徴	人数	コメント
1 語句の選択 (言い回しなど)	31	「言葉遣い あなたとか言わない」、「ところどころに文語的表現がみられたから」、「『つまるどころ』『美人ときている』『さて』など日本語の話し言葉ではあまりやらない表現だったから」、など
2 文末詞の使用	23	「語尾に違和感があった」、「現代ではあまり使われない『～しているわ』『～なのよ』が使われている」、「もちろんよ！って言わないから」、「女言葉の多用」、など
3 文の構造 (主語・述語関係、指示語、文の長さなど)	18	「会話体でありながら、主語、述語等がはっきりしている」、「主語と目的語がはっきりしている」、「“それ”が多い」、「1文が長い」、「彼はや私がといった代名詞が多いから」、など
4 文の硬さ (フォーマリティ)	16	「Aの日本語はかたいと思った（仲良しのわりに）」、「文体の堅苦しさを感ずる」、「かしこまった話し方だと感じた」、など

5	会話内容	8	「Aの方がいろいろとあいまいじゃない」、「話すときには言わなくていいことまで、言っている」、「状況を細かく説明している感じだったから」、など
6	その他	12	「忠実に訳しているような感じがある」、「Aは、日本語に翻訳したものをなるべく自然な言い回しに変えている感がある」、「直訳っぽい」、「なんとなく」、など

(1) 回答の中には複数の特徴について述べたものもある。

(2) コメントは原文のまま掲載した。

(3) 未回答の2名分は対象外とした。

表7に挙げた特徴に対する印象をまとめたのが表8である。文末詞については、「女性の話し方についてのステレオタイプがあるのではと感じる」、「あくまでも登場人物の1人として見る。自分にあてはめられない」、「男女の区別の仕方が過度だと思う」、「こんな話し方する人だけじゃないのになぁーと思います」、「むりやり女言葉をつかっているように感じる、違和感」、「やわらかい印象をうける」、「いずい、じっくりこない」（「いずい」は宮城や岩手の方言で「じっくりこない、落ち着かない、居心地がわるい」などの意味）、「日本人で普段はそういう言葉を使わないから、作中は自然でも実際は不自然」、「女らしいけど使う人はいない」といった意見があった。

表8 「テキストAの特徴として挙げた点についてあなたはどうか？」

	特徴	コメント
1	語句の選択 (言い回しなど)	「すこし外国風が残っていてよいと思う」、「読みづらい」、「なんかいも『あたし』と言っていて、不自然」、「確信している。などあまり話すときに使わない」、「日本語に訳されると丁寧な言葉になるような気がする。でも不自然」、など
2	文末詞の使用	「女性の話し方についてのステレオタイプがあるのではと感じる」、「あくまでも登場人物の1人として見る。自分にあてはめられない」、「男女の区別の仕方が過度だと思う」、「こんな話し方する人だけじゃないのになぁーと思います」、など
3	文の構造 (主語・述語関係、 指示語、文の長さ など)	「文の構成が日本語らしくない」、「文の構成がしっかりしている」、「会話の中で指している人物がわかる文脈であれば、人称代名詞はいらない」、「誰が動作を行ったかが分かりやすいが読みにくいと感じた」、「完全に文が作られすぎているように感じた」、など

4	文の硬さ (フォーマリティ)	「もっと口語的なほうが読みやすい」、「翻訳される特徴のひとつだと感じる」、「翻訳だということがすぐ分かってしまう」、「小説ならそれでいいと思う」、「読んでいて疲れる文だと感じた」、など
5	会話内容	「まわりくどいと感じました」、「詳しく説明している、はっきりさせたいように感じた」、など

(1) コメントは原文のまま掲載した。

(2) 9名は未回答であった。

テキスト B の特徴として挙げられたものを表 9 にまとめると、指摘の多いものから順に 1. 「会話の自然さ」、2. 「文の構造（主語・述語関係、指示語、文の長さなど）」、3. 「語句の選択（言い回しなど）」、4. 「会話内容」、5. 「文末詞の使用」であった。ここでも、1 から 5 のいずれにも当てはまらないものは、6. 「その他」とした。文末詞の使用を特徴として挙げたのは 3 人と、翻訳テキストの 23 人から大幅に減少した。

表 9 「テキスト B にはどのような特徴があるか？」

	特徴	人数	コメント
1	会話文の自然さ	43	「リアルな会話っぽい」、「普段自分が使うような口語体で読みやすい」、「読んでいて違和感を感じない、自然な感じ」、「必要以上に文を作っていない」、など
2	文の構造 (主語・述語関係、指示語、文の長さなど)	23	「目的語が不明な場合が多い」、「主語が抜けている」、「『…』が使われていて、日本人のさっしてほしい部分が表されている」、「文として完結していないものが多い」、「みじかい」、など
3	語句の選択 (言い回しなど)	23	「古き良き時代など日本語的表現が含まれているから」、「『秒読み』や『古き良き時代』など日本語を知らなければ使われない言葉が多い」、「日本語独特の表現があると思う」、など
4	会話内容	9	「自分を主張したがない」、「詳しく言わず、曖昧な印象がある」、「情報量が多くない」、「遠慮している感じや、あいまいな感じ、恥じらっている感じがある」、など
5	文末詞の使用	3	「特に目立った女言葉がない」、「語尾が日本人がふだん使うものである」、「(2) であげたような言葉を使わず、フランクな女同士で話している」、など
6	その他	8	「なんとなく」、「特徴はないように感じた」、「会話に人間味がある」、「あまり特徴があるとは思わない」、など

(1) 回答の中には複数の特徴について述べたものもある。

- (2) コメントは原文のまま掲載した。
 (3) 未回答の1名分は対象外とした。

表9の特徴についてどう感じたかをまとめたのが下の表10である。テキストBの特徴の中で文末詞の使用についての印象としては、文末詞の使用が少ないため「親しみを感ずる言葉遣いで自分に当てはめやすい」、「読みやすい」、「自然」などの意見があった。

表10 「テキストBの特徴として挙げた点についてあなたはどうか？」

特徴	コメント
1 会話文の自然さ	「親近感がある」、「話している情景がうかびやすい」、「場面を思い浮かべやすい」、「スムーズに読めるのは日常会話に近いからではないかと思った」、「小説として読みやすいのはこちらだと思う」、など
2 文の構造 (主語・述語関係、 指示語、文の長さ など)	「わかりやすい」、「最初から読まないといけない」、「リアリティがある。本当の会話のようだ」、「短くてよみやすい」、「あまり多くのことを人に伝えない」、など
3 語句の選択 (言い回しなど)	「含みのある表現がリアルで内容が入りやすい」、「秒読みや古き良き時代の女などの表現が今風でおもしろい」、「最初の会話文からもう日本語っぽいと思った」、「今風ではないと感じる」、など
4 会話内容	「普段の会話を聞いているようだ」、「共感を大事にする日本女性の特徴。めんどくさいと思う」、「逆に説明や背景描写があってもいいとおもう」、「分かりやすく入ってくる」、など
5 文末詞の使用	「親しみを感ずる言葉遣いで自分に当てはめやすい」、「読みやすい」、「自然」、など

- (1) コメントは原文のまま掲載した。
 (2) 13名は未回答であった。

翻訳テキストと非翻訳テキストの読者受容をまとめると、翻訳テキストに使われる女性文末詞について「やわらかい印象をうける」という好意的な意見も1件あったが、多くの方は「女性の話し言葉がいかにも、という感じであらわれている」、「女性の話し方についてのステレオタイプがあるのではと感じる」、「男女の区別の仕方が過度だと思う」、「こんな話し方する人だけじゃないのになあーと思います」などと否定的な意見を述べていた。一方で、非翻訳テキストの文末詞使用に関しては「自然」、「読みやすい」、「親しみを感ずる言葉遣いで自分に当てはめやすい」などといった肯定的な

意見が見られた。これらの結果を見る限りでは、読者は翻訳テキストに女性文末詞が多用されるのを必ずしも求めてはいないと考えられる。最後に、今回のアンケートは翻訳テキストの読者受容を調べるものであり、個別のテキストを批判するために行ったものではないことを記しておきたい。

4. おわりに

本稿は、現代小説の翻訳・非翻訳テキストの女性登場人物の会話文にみられる文体比較を、文末詞の使用に焦点を当てて行った。非翻訳テキスト『あまからカルテット』と翻訳テキスト『ハリー・ウィンストンを探して』の複数の登場人物の会話文を定量分析した結果、『カルテット』の登場人物の方が『ハリー』よりも女性文末詞の使用率が低く、また登場人物の性格づけによって女性文末詞の使用率にばらつきがあることが分かった。さらに、現実の女性の発話と比較すると、非翻訳テキストは実際の発話に近い結果となった。翻訳・非翻訳テキストの文体の比較研究はまだ事例が少ないため、今後この分野のさらなる研究が求められる。

読者受容を探るためのアンケートでは、全体の8割以上の方が翻訳・非翻訳テキストを正確に区別できることが分かった。また、翻訳テキストの文体的特徴として語句の選択、文の構造などが挙げられたが、文末詞の使用、特に女性文末詞の多用に対する指摘も多いことが分かった。今回のアンケートは限定された集団に対して行ったもので、読者の翻訳テキストへの期待を探るためにはより広範な調査が求められる。それでもなお、今回の調査はひとつの参考にはなるであろうと考える。

*本研究は JSPS 科研費 16K02043 の助成を受けたものです。

.....

【著者紹介】

古川弘子 (FURUKAWA Hiroko) 東北学院大学文学部英文学科准教授。出版社で雑誌と書籍の編集に携わった後、英国 University of East Anglia より PhD 取得 (Literary Translation / 2011 年)。同大学のポストドクター研究員を経て 2012 年 4 月より同大学に勤務。ジェンダーの視点から文学翻訳研究を行っている。

.....

【註】

- 1 柚木麻子は 2008 年に「フォーゲットミー、ノットブルー」(『終点のあの子』収録)でオール読物新人賞を受賞し作家デビューした。一方、ローレン・ワイズバーガーはデビュー作の *The Devil Wears Prada* (2003; 日本語訳は佐竹, 2006) が大ヒットし、2006 年にはハリウッドで映画化もされた。
- 2 収集したデータを再精査した結果、表の数字は古川 (2013) から微修正を行った。以前の *feminine forms* の数値はリーが 42.30%、エミーが 41.38%、アドリアナは 41.08% であった。
- 3 金水による役割語の定義は以下のとおりである。「ある特定の言葉遣い (語彙・語法・言

い回し等、あるいはスピーチ・スタイル)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを『役割語』と呼ぶ(金水, 2000, p. 311)。

- 4 同書には他に2篇(「夜の大捜査先生」と「ゆとりのビアガーデン」)が収録されているが、アッコちゃんと三智子が主人公ではないため分析対象からは外した。
- 5 「夜のアッコちゃん」では勤務先の出版社が倒産したため、アッコちゃんはポトフの移動販売店「東京ポトフ」を始める。
- 6 この意識調査はアンケート形式で、2005年10月から2006年6月まで日本シナリオ作家協会会員の315名を対象として行われた。回答を得たのは30～80代までの脚本家計80名で男女比はほぼ4対1、首都圏在住が86%だった。知的職業従事者以外に日常的に女性文末詞を使わせる登場人物は、中流以上の主婦、世間知らずの箱入り娘、苦勞知らずの娘、気取った女性、男性同性愛者、ニューハーフだという。
- 7 Translation style と translator style を日本語に訳すと、前者は「翻訳文体」、後者は「翻訳者文体」となるであろう。しかしながら、柳父が西洋諸言語の文法的特徴に影響を受けた日本語の文体を「翻訳文体」と呼んだこともあり(柳父, 2004)、混乱を避けるためにここでは英語表記のままにしている。柳父のいう翻訳文体は英語では“translational style”(Wakabayashi, 2011, pp. 33)と表記されるが、translational style は翻訳テキストに使われる場合には原文の影響を受けた文体ということになるため、サルダーニャの示した translation style に近い概念であるといえるだろう。

【引用文献】

- Chesterman, A. (2016) *Memes of Translation: The Spread of Ideas in Translation Theory* (revised edition), Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Fielding, H. (1997) *Bridget Jones's Diary*, London: Picador.
- Fukuchi Meldrum, Y. (2009) Translationese-specific Linguistics Characteristics: A Corpus-based Study of Contemporary Japanese Translationese, *Invitation to Translation Studies* 3: 105-131.
- Fukuchi Meldrum, Y. (2010) *Contemporary Translationese in Japanese Popular Literature*, Berlin: Lap Lambert.
- Furukawa, H. (2009) 'Fabricated' Feminine Characters: Overemphasised Femininity in the Japanese Translation of *Bridget Jones's Diary* and a Japanese Novel *Kitchen*, *Norwich Papers* 17: 73-89.
- Furukawa, H. (2017) Kiki and Hermione's Femininity: Non-translations and Translations of Children's Literature in Japan, *Invitation to Interpreting and Translation Studies* 17: 20-34.
- Furukawa, H. (forthcoming) A De-feminized Woman in Conan Doyle's *The Yellow Face*, in J. Boase-Beier, L. Fisher & H. Furukawa (eds) *The Palgrave Handbook of Literary Translation*, New York: Palgrave Macmillan.
- Okamoto, S. and S. Sato (1992) 'Less Feminine Speech among Young Japanese Females', in K. Hall et al. (eds) *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference, April 4 and 5, 1992, Vol. I*, Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group, pp. 478-488.
- Saldanha, G. (2011) Translator Style, *The Translator* 17 (1): 25-50.
- Shibamoto, J. S. (1985) *Japanese Women's Language*, New York: Academic Press.

- Wales, K. (2011) *A Dictionary of Stylistics* (3rd edition), Edinburgh: Pearson Education Limited.
- Wakabayashi, J. (2011) 'Secular Translation: Asian Perspective', in K. Malmkjaer & K. Windle (eds) *The Oxford Handbook of Translation Studies*, New York: Oxford University Press, pp. 22-36.
- Weisberger, L. (2003) *The Devil Wears Prada/ Everyone Worth Knowing*, New York: Harper.
- Weisberger, L. (2008) *Chasing Harry Winston*, New York: Harper.
- 東照二 (2011) 『社会言語学入門』(改訂版) 研究社
- 亀井よし子 (訳) (1998) H. フィールドディング (著) 『ブリジット・ジョーンズの日記』ソニー・マガジズ
- 金水敏 (2000) 「役割語探求の提案」 in 佐藤喜代治 (編) 『国語論究 第8集 国語史の新視点』明治書院, pp. 311-351.
- 金水敏 (2014) 「フィクション話し言葉について—役割語を中心に」 in 石黒圭・橋本行洋 (編) 『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房, pp. 3-11.
- こんぺい党 (2012) Amazon.co.jp カスタマーレビュー (Online)
https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R3A4YND5959QTS/ref=cm_cr_ar_p_d_rvw_ttl?ie=UTF8&ASIN=416783202X (September. 11, 2017)
- 佐竹史子 (訳) (2006) L. ワイズバーガー (著) 『プラダを着た悪魔 (上・下)』早川書房
- 佐竹史子 (訳) (2009a) L. ワイズバーガー (著) 『ハリー・ウィンストンを探して』早川書房
- 佐竹史子 (2009b) 「訳者あとがき」 in 佐竹史子 (訳), L. ワイズバーガー (著) 『ハリー・ウィンストンを探して』(佐竹史子訳) 早川書房, pp. 525-527.
- 中村桃子 (編) (2010) 『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- 中村桃子 (2012) 『女ことばと日本語』岩波書店
- 古川弘子 (2013) 「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳—」 『通訳翻訳研究』 13: 1-23.
- 益岡隆志・田窪行則 (2014) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松岡佑子 (訳) (1999) 『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社
- 水本光美 (2010) 「テレビドラマ—“ドラマ語”としての『女ことば』」 in 中村桃子編 『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社, pp. 89-106.
- 柚木麻子 (2015a) 『あまからカルテット』(文春文庫) 文藝春秋
- 柚木麻子 (2015b) 『ランチのアッコちゃん』(双葉文庫) 双葉書房
- 柳父章 (2004) 『近代日本語の思想—翻訳文体成立事情』法政大学出版局

